

『源氏物語』の和歌を読む（七）

加藤 睦

—

そのわたり近きながしの院におはしまし着きて、預り召し出づるほど、荒れたる門の忍ぶ草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し。霧も深く露けきに、簾をさへ上げたまへれば、御袖もいたく濡れにけり。「まだかやうなることをならはざりつるを、心づくしなることにもありけるかな。

いにしへもかくやは人のまどひけんわがまだ知らぬしのかめの道

ならひたまへりや」とのたまふ。女恥ぢらひて、

「山の端の心もしらでゆく月はうはのそらにて影や絶えなむ心細く」とて、もの恐ろしうすごげに思ひたれば、かのさし集むたる住まひの心ならひならんとをかしく思す。
(夕顔卷)

◇「いにしへも…」詠について

この歌で光源氏は「いにしへ」の「人」に思いをはせながら、

自分の「心づくしなる」思いを詠じている。その「人」については、文字通り「昔の人」を一般的に示す言い方なのか、あるいは特定の男（具体的には頭中将）を寓意・暗示した表現なのか、という点で理解が分れている。諸注の中では、新大系が「頭中将を暗示して言う」と注する他、新編全集（Ⅱ全集）は、「昔の人もこのようにして……」と訳出しながら、一説として、

「人」に、女の以前の恋人の意を寓すると見る説がある。

というように、寓意説を紹介している。また、玉上評釈も、この歌を詠じた時の源氏の心理を解説する中で、

……頭の中將の常夏なら、かれも自分が考えるようなことを考えるだろう、やはり早朝に同車して何所かに行つたことがあろうとも知れぬ。

と述べ、源氏の念頭に頭中将があつたことを想定している。

吉見健夫氏²、今井上氏³は、寓意説を支持する立場から、「いにしへ」の「人」について、それぞれ次のように論じている。

● 上句で、昔の人もこのように恋路に惑い歩いたものだろうか
と疑うが、自分がそれまでにないような恋心を抱いているこ

とを「いにしへ」を振り返りつつ訴えるという趣向であり、当時の和歌によくみられるものである。「いにしへ」にありけん人もわがごとく妹に恋ひつついねがてにけん」（古今和歌六帖・第五・三〇八一・詠み人知らず）「わがごとくもの思ふ人はいにしへも今行く末もあらじとぞ思ふ」（拾遺和歌集・恋五・九六五・詠み人知らず）などの類例に源氏の歌も属する。ただし源氏の歌は、「人」が具体的には頭中将を示唆するらしい点がやや独自のである。それは歌の後の「ならひたまへりや」（経験ありますか）という女への問い掛けで明らかだとも思われるが、前の男の頭中将にライバル心を抱きつつ、これまでの誰にも負けないほどの強い恋心をもっていることを訴える歌であろう。（吉見氏）

• ここに言う「いにしへ」の人とは誰のことであるのか。某院までの道中、夕顔とそうしたことが話しあわれたわけではなく、一般論として言ったとしてもやはり唐突で落ち着かないと思う。そう考えるとき、夕顔との関わりにおいて、源氏からするとまさに「いにしへ」の人、先人と呼ぶにふさわしい人物が一人あつたことが想起される。ほかでもない夕顔のかつての愛人、頭中将である。（今井氏）

今井氏が当該歌の上句に「一般論として言ったとしてもやはり唐突で落ち着かない」印象を看取しているのは、自然な感想だと思ふ。一方で、「いにしへ」の「人」への言及が、「当時の和歌によく見られる」類型的趣向であるという吉見氏の指摘もそのまま肯定されよう。けれども、「いにしへ」の「人」に、「前の男」「かつての愛人」の示唆や寓意を読み取る見解は首肯できない。

「いにしへ」あるいは「昔」に先例を尋ねる発想は、恋歌に限定されず、源氏物語にもそれ以外の作品にも広くその用例を見出すことができる。

• いにしへにありきあらずは知らねども千年のためし君にはじむむ

（古今集・賀・三五三・素性法師・「もとやすのみこの七
十の賀のうしろの屏風によみてかきける」）

• いにしへはありもやしけむいまぞしるまだ見ぬ人を恋ふるものとは
（伊勢物語・一一一段）

• さこそはいにしへも御心にはなぬ例多くはべれ、とこころ
やは世のもどきをも負はせたまふべき。
（夕霧巻）

• 「……昔もたぐひありけりと思たまへなすにも、さらに行く
方知らずのみなむ」などいと多かめれど、……
（夕霧巻）

• 思ひあまり昔のあとをたづぬれど親にそむける子ぞたぐひなき
（蜚巻）

吉見氏が引用している二首の恋歌を含め、右のように「いにしへ」「昔」を引き合いに出す場合、その「いにしへ」「昔」は、はるか遠い過去でなければ意味をなすまい。恋歌の場合、はるかな過去と比較することによって自分の思いの独自性・特殊性を強調すること自体、蜚巻の源氏詠に「思ひあまり昔のあとをたづぬれど」とあるように、やむにやまれぬ思いにかられていることを示す芝居がかつた身ぶりである。今井氏が看取した「唐突で落ち着かない」印象は、「いにしへ」に思いをはせる大げさな詠み方に必然的に伴うものと理解すべきである。したがって、その印象を解消

するために、「いにしへ」の「人」に「先人と呼ぶにふさわしい人物」を具体的に比定していこうとする論の進め方は、当該歌の発想と齟齬をきたしている。

今井氏は、また、

「いにしへもかくやは人のまどひけん」という文はごく自然に反語文を期待させるが、諸注のごとく「いにしへ」の人を単に先人の謂とすると「昔の人もこうして惑ったのだからか。いやしていない」ということになってしまい、意不通となる。

と述べるが、当該歌の上句は実際ほとんど反語文なのであり、このように惑溺したのは歴史上私が初めてなのではないかという誇張された詠嘆を含んでいると見てよい。仮に先例を思い描くとしても、それに該当する人物は、昔物語中の人物、たとえば『伊勢物語』芥川段で未明に女を盗み出した昔男のような現実離れた存在であるはずである。「いにしへ」の「人」へのそのような大げさで芝居がかった言及から、女の以前の恋人というような現実的な人物を想起し、あるいは「前の男の頭中将」への「ライバル心」を看取するのは、一首の根幹をなす趣向に逆らう読み取りと言わざるをえない。

◇「山の端の…」詠について

①比喩の認定

この歌は叙景歌ではないから、「山の端」「月」が単なる景物ではなく、何かをそれに喩えて詠まれていることについては論を俟たない。その比喩の認定について、諸家の見解は次の両説に分か

れている。

A説：「山の端」は源氏、「月」は夕顔の比喩とする説。

B説：「山の端」は夕顔、「月」は源氏の比喩とする説。

A説は、諸注が一致して採用している比喩の理解である。これに基づく解釈において、「山の端の心もしらでゆく月」は、

・山の端（源氏）の心も知らないで、ついでゆく月（私）は、途中で影が消えてしまふかも知れません。（全書）

・行く先がどこかも知らず、お気持も分らないのに、あなたをお頼りしてついで来た私は、途中で消えてしまうのではないでしょうか。（集成）

のように、源氏に誘われるまま見知らぬ某院に連れて来られた夕顔の比喩と解釈される。

B説は、「山の端」は女の、「月」は男の比喩となるのが通例であるとの認識に基づいて、清水婦久子氏⁴が提唱した説で、松下直美氏⁵、今井上氏、津島知明氏⁶がこれを支持している。

この説に従う場合、「山の端の心もしらでゆく月」は、清水氏⁷が、

月の出入りする「山の端」（女）の気持ちもおわかりにならないで、ふらふらと空をさまよっている「（十六夜の）月」（あなた）は、明るくなつた上空（上の空）でその「かげ」（お姿）がふと消えてしまうのではないでしょうか。

と訳出しているように、女（夕顔）の気持ちもわからないでふらふらさまよう男（源氏）の比喩と解釈されることになる。

「山の端」と「空ゆく月」との関係は、一般に、

○月が西の山の端に向つて空を行く

○月が東の山の端を出て空を行く

のいずれかであるが、当該歌は明け方に詠まれていたので、そこに詠まれた「月」は西の「山の端」に向つて空を進んでいるものと考えるのが自然である。当該歌を正しく解釈するには、このような位置関係や方向性を確かに把握することが必須である。それと同じように肝要なのは、「心もしらで」の意味・用法を正確に理解することである。

帚木の心をしらでその原の道にあやなくまどひぬるかな

(帚木卷)

寄る波の心も知らでわかか浦に玉藻なびかんほどぞ浮きたる

(若紫卷)

吉見氏は、右の二首を適切に引証しつつ、A説を支持して次のように述べている。

・この二例は、いずれも上句では愛情関係における相手の真意を理解できないといい、下句でそれゆえの惑いや不安を詠じるもので、ほぼ同じ趣向の夕顔の歌もそれらと同様に解せよう。

・「山の端の心もしらでゆく」という表現は、廢院へ連れ出すという源氏の強引な扱い方への夕顔の不安な思いとまさしく対応するものなのである。

「帚木の…」「寄る波の…」の二首において、「しらで」は「前もってわからないで」という意味を表している。「帚木の…」の歌では、前もって帚木の心がわからないままその原の道に迷い入ってしまったことが嘆かれ、「寄る波の…」の歌では、「寄る波の心」が前もってわからないまま玉藻がなびくことの不安を歌つ

ている。

・よくもあらぬかたちを、深き心も知らで、あだ心つきなば、後くやしきこともあるべきを、と思ふばかりなり。

(竹取物語)

・あはれ、げにいとをかしかなるところを、命も知らず、人の心も知らねば、「いつしか見せむ」とありしも、さもあらばれ、やみなむかしと思ふもあはれなり。

(蜻蛉日記)

右の用例においても、前もって相手の「心」がわからないことに伴う、将来への不安が述べられている。夕顔の返歌の「しらで」も全く同じ意味・用法であり、「山の端の心もしらでゆく月」は、目ざす「山の端」の「心」が前もってわからないまま空を行く頼りない存在なのである。

以上のように、当該歌における「山の端」と「月」の位置関係や方向性、ならびに「心もしらで」の意味を確認した上で、A・B両説を省みる時、吉見氏の説くように、A説はこれに無理なく適合するが、B説は成り立ちがたいことがわかる。

月の出入りする「山の端」(女)の気持ちもおわかりにならないで、ふらふらと空をさまよっている「(十六夜の)月」(あなた)は……

という清水氏の解釈において、当該歌の「山の端」と「月」の位置関係や方向性は全く踏まえられておらず、「心もしらで」についても誤った意味把握が行われている。その点では、松下氏の解釈、

山の端(私)の心も知らずに行く月(貴方)は、上空で、当てにならなく、その姿を消してしまうのではないのでしょうか。

も同様の難点を含んでおり、成り立ちえない。

清水氏、松下氏は、当該歌の「月」と「山の端」について、次のように論じている。

● 古来の和歌において、詠み手（女）は山の端から出てくる月を待っていた。男が月にたとえられたのは、女のもとへ通ってくる時が夜であったからで、「山の端の心」という表現は、いつも待たされてばかりいて、自らは行動を起こすことのない女の気持ちと解することができる。（清水氏）

● 当該歌は、まず、景物のみの自然詠としても成立していた。山の端が月の入りを待ち望んでいるのに、その山の端の心も知らずに上空で消えてしまいそうな月のことを詠んでいる。

……そこに、人事の意味を加えるならば、その消えかかる景物の「月」を用いて、私（夕顔）の心も知らないで行く月（源氏）は、「月」と同様に途中で姿を隠してしまうのでは
ないか、と詠んだ歌と捉えられよう。（松下氏）

両氏の論述は、和歌に詠まれた「山の端」「月」の用例に見られる全般的傾向を踏まえて行われており、決して恣意的なものではないが、歌語の使用法に個々の和歌の趣向をこえた一般的な法則が存在したりはしないのであるから、用例から帰納した傾向が当該歌における「山の端」「月」の詠まれ方に合致するか否かは、もう少し厳密に検証される必要がある。当該歌では、「山の端」は「月」がそこから出る場所としては詠まれておらず、また「山の端」が「月」の出や入りを待ち望んでいるということもない。人事的な意味あいにおいても、夕顔は源氏の訪れを待つ女として描かれてはいない。和歌自体の発想・構造と、その解釈との間に

このような齟齬や乖離が生じている場合、どれほど多くの用例を引きながら論証し、あるいは念入りの説明を行っても、その齟齬や乖離を解消することはできない。

②「うはのそらにて影や絶えなむ」

当該歌の下句については、大方の注釈書において、「死ぬのではないかという連想を誘う不吉な表現」（集成）、「自身の死の予感と死との関連を読み取るのが通説であったが、近年は、恋の不安をそこから読みとる説が複数提示されている。「月」を源氏の比喩と解する諸氏は、必然的にこの下句に源氏の愛情への不安を読み取っているが、「月」を夕顔自身の比喩と解する吉見氏も、次のように論じている。

下句の「うはのそらにて影や絶えなむ」という表現に女の死の予感を読み取る解釈が一般的ではあるが、例えば「心にもあらぬわが身のゆきかへり道のそらにて消えぬべきかな」（道信集・七三）や、若菜上巻の女三の宮が源氏の夜がれを恨む歌に「はかなくてうはの空にぞ消えぬべき風にただよふ春のあは雪」とあるように、恋の不安におののく気持を身の消えゆくことに喩えるのは当時一般的な表現方法である。第一義的には相手の愛情への不安を表すという一般的な類型に即して解するべきであろう。

しかしながら、通説のような理解は、文脈との整合性という観点から見て、引き続き肯定されるべきであると考える。

この歌の直後に、物語の語り手は、「もの恐ろしうすごげに思ひたれば」と述べ、さらにそれに続けて、「かのさし集ひたる住

まひの心ならひならんとをかしく思す」という源氏の感想を記している。この「もの恐ろしう……」は、某院に連れて来られた女の恐れを事実として示したものであり、「かのさし集ひたる……」という源氏の受け止めかたも、女が現におびえている様子を前提にしたものであって、それを割り引いて理解しなければならぬ必然性はない。

夕顔の返歌は、源氏から「わがまだ知らぬしののめの道」をあなたは「ならひたまへりや」と問いかけられたのに対して、「初めてのこと、恐ろしくてしかたがない」という回答になっている。「山の端の心もしらで行く月は」という上句は、諸注において、「山の端（源氏）の本心も知らなくて、誘われるままに行き行く月（私）は」（大系）というように、源氏の心がわからぬということに焦点を当てて限定的に解釈されているが、これが「わがまだ知らぬしののめの道」という言葉を受けていることから考えて、もう少し広く、正体もはつきりとわからぬ男に、見知らぬ邸に突然連れて来られ、これからどうなるのかも皆目わからないという状況を詠んだものと解するのが妥当であろう。このような上句の意味と、和歌に続く叙述から見て、「うはのそらにて影や絶えなむ」という下句に、これから先、死んでしまうのではないか、という恐れを読み取るのは、きわめて自然な読解といつてよい。

もとより、「うはのそらにて影や絶えなむ」は、恐れを誇張して表現するためのレトリックであって、夕顔がこの歌を詠んだ時点で、死を現実的なものとして恐れていたわけでもないし、まもなく唐突に訪れる自らの死を予感していたということもないであ

ろう。当該歌自体、源氏が大きな詠みぶりで恋への感潮を示したのに呼応して、同じように誇張して自らの恐れを表現したものと理解するのが妥当である。

ただ、源氏の贈歌が、たとえば『伊勢物語』の芥川段などをかすかに連想させ、夕顔の返歌が、自らの死への恐れに触れていることは、これから先の物語に不穏な影を落としてことは確かである。

源氏はこのあと、夕顔をとり殺した物の怪の姿を見て、

昔物語にこそかかることは聞け、といとめづらかにむくつけけれど、

と感ずることになるが、そのような昔物語の怪異を、「いにしへも……」山の前……の贈答歌は、それとは知らずに招き寄せているのである。

二

「旧き枕故き衾、誰と共にか」とある所に、

亡き魂ぞいと悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに

また、「霜華白し」とある所に、

君なくて塵積もりぬるとこなつの露うち払ひいく夜寝ぬらむ
一日の花なるべし、枯れてまじれり。
(葵卷)

亡くなった葵上の喪が明けて、源氏が左大臣邸を去った後、左大臣は御帳台の中に源氏が詠み残した和歌を見出す。そのうちの一首、「亡き魂ぞ……」の歌については、「いと悲しき」と表出さ

れた源氏の悲しみの内実について、諸注の解釈が必ずしも一致していない。

この歌は、「寝し床のあくがれがたき心ならひ」によって「亡き魂」のことが「いとど悲し」く感じられる、ということを詠んでいるのだが、どういう「心ならひ」によって、どのように悲しみが募るのかについて、理解が分れているのである。

●(二人) 共寝した床からいつも離れにくかったので、亡き魂が(今もこの床から離れかねているかと思うと) 一入悲しい。(玉上評釈)

●亡き人の魂もさぞ去りがたく思っているであろうと思うと、いよいよ悲しみがまさる、二人が共寝した床をいつも離れがたく思っていたに付けて。(集成)

●亡き人の魂を思うといよいよ悲しい、共に寝た床をいつも離れがたく思っていたのだから、の意。(新大系)

右に引用した諸注は、葵上生前の、床からいつも離れにくく思っていた「心ならひ」(少しはつきりしないが、たぶん葵上の)によって、今も葵上の魂がこの床を去りがたく思っているであろうと思うといっそう悲しくなる、という解釈を示している。「寝し床のあくがれがたき」という表現は、「かつて共寝した床が今離れがたい」という意味に解するのが自然なので、「心ならひ」を葵上生前のものとする解釈には従えない。当該歌の「心ならひ」は、詠歌した時点における源氏の「心ならひ」と理解すべきである。次に引用する中で、全書・大系は、その点を正しく把握している。

●共寝の床が見棄て難い私の心から推して、亡くなつた魂もさ

ぞや同じ思ひであらうと思ふのがひどく悲しい。(全書)

●亡くなつた葵上の魂が(私と同様に、共に寝た床をあくがれ出かねているかと思うと)、ひどく私は悲しい。私は、葵上と一緒に寝た床が、落着かず、ふらふらと振り捨てて離れ行き難い習慣となつていたのである。(大系)

●亡き人とともに寝たこの床をいつも離れがたく思っていたが、それについてもこの床を離れていったその人の魂はどんなにせつない思ひだつたらうかと、ひとしお悲しくてならない。(新編全集)

ただ、両書が、下の句に葵上の魂の現在の思いを読み取っているのは妥当でない。葵上はすでに亡くなり御帳台を去つて行つたのだから。その点では、新編全集が「この床を離れていったその人の魂はどんなにせつない思ひだつたらうか」と過去のこととして解しているほうが相対的に自然である。

ただし、源氏が思いをはせた亡き魂の思いとは、単に共寝した床を離れなければならなかつたつらさには限定されないであろう。源氏は、葵上の死後もそれまで二人が共寝していた御帳台に寝ていた。「寝し床のあくがれがたき心ならひ」とは、朝が来る毎にその床を離れるのが切なく、また喪が明けたら左大臣邸を去ることになるが、それもつらいという心情を表している。そういう自らの「心ならひ」から、源氏が思い知つたのは、「寝し床」に具象化されるような愛着のあるものから「あくがれる」ことのつらさであつたらう。当該歌の「いとど悲しき」は、馴れ親しんだこの世を去り、愛する人々と別れて、「あくがれ」なくてはならなかつた葵上の魂を思つて、改めて募っていく悲しみであつ

たと推察されるのである。

三

尚侍の御もとに、例の中納言の君の私事のやうにて、中なるに、「つれづれと過ぎにし方の思ひたまへ出でらるるにつけても、

こりずまの浦のみるめのゆかしきを塩焼くあまやいかが思はん」

さまざま書き尽くしたまふ言の葉思ひやるべし。(須磨卷)

須磨に退去した源氏から、都の朧月夜に贈られたこの歌に対しては、ほとんど全ての注釈書が、

性懲りもなくあなたにお逢いたくてならないのですが、須磨の浦の塩焼く海人―あなたは どうお思いなのでしょう。か。

(新編全集)

というように、「塩焼くあま」＝朧月夜という比喩の認定を行い、一首を、「私はあなたに逢いたい、あなたは どうでしょうか」という問いかけの歌として解釈している。その中で、例外的に集成は、「海士やいかが思はむ」は、世間を憚る気持を表す。」という見解に基づいて、

性懲りもなく、あなたにお会いしたいと思います、塩焼く海士はどう思うことでしょうか。

という解釈を施している。

「塩焼くあま」＝朧月夜という比喩認定を行っている諸注においては、たぶん「浦のみるめのゆかしき」を「あなたに逢いたい」

という意味に還元し、同時に「塩焼くあま」を「あなた」に置き換えて、一首を理解しているであろう。

しかしながら、そういう理解は、一首の表現や構成と齟齬をきたしていると思う。意味への還元を急がず、当該歌に詠まれている事柄をそのまま受けとめれば、

○「浦のみるめがほしい」ということは、浦に海松布を刈り取りに行きたいという話者の思いを表している。

○「塩焼く海人」は、その話者の行為を目撃し場合によっては制止するかもしれない第三者として詠まれている。

という理解に達するであろう。歌自体が明示しているそのような事柄に適合するのは、「塩焼く海人やいかが思はん」に「世間を憚る気持」を読み取る集成の解釈である。当該歌の下の句は、

●人の思ひはべらんことの恥づかしきになん、え聞こえさすまじき。(空蟬卷)

●笹分けば人や咎めむいつとなく駒なつくめる森の木がくれの傍線部と同様に、他者の思惑や咎めだてへの懸念を表現しているのである。(紅葉賀卷)

通説のような理解では、「私はあなたに逢いたい、あなたは どう思いますか」という単純素朴な問いかけになるが、源氏と朧月夜の関係は、自分たちの気持ちでどうにかなるものではなく、世間を憚る事情を抱えているのであるから、その意味でも集成の解釈は自然である。

諸注が当該歌の本歌として指摘している、

しらなみはたちさわぐともこりずまのうらのみるめはからん

とぞ思ふ

(古今六帖・三・一八七〇)

の「(たちざわぐ)しらなみ」と同様、「塩焼くあま」は、逢うことを妨げるものとして詠まれている。本歌では、障害をもろともしない決意を表明しているが、自分の思いを通せられるはずもない源氏としては、「懲りもせずあなたに逢いたい」というやむにやまれぬ思いとともに、「世間がそれを許さないだろう」という断念を合せて詠みこむしかなかったのである。

四

姫君の御文は、心ことにこまかなりし御返りなれば、あはれなること多くて、

浦人のしほくむ袖にくらべみよ波路へだつる夜の衣を

(須磨卷)

物の色、したまへるさまなどいときよらなり。

当該歌について、諸注は、たとえば、

● 浦人の潮を汲む袖―あなたの涙に濡れたお袖と比べてみて下さい。波路を隔ててお会いできず泣き濡れている私の夜の衣を。

(集成)

● 浦人が潮を汲むように泣き濡れていらつしゃるというあなたの袖と比べてごらんくださいまし。遠く波路を隔てた都で毎夜涙に濡れている私の衣とを。

(新編全集)

というように、「浦人のしほくむ袖」が「源氏の涙にぬれた袖」の比喩になっているという認定に基づいて解釈を施している。

この歌は、須磨から源氏が詠み贈った和歌に紫上が返した歌だ

が、贈歌そのものも、源氏がそれを書きつけた手紙の文面も、物語に引用されてはいないので、贈歌の内容も表現も知ることはできない。

新編全集が、「浦人が潮を汲むように泣き濡れていらつしゃるというあなたの袖」と言葉を補って訳出しているのは、源氏の贈った歌に、「私は須磨の浦で海人のように涙で袖をぬらしている」という内容が詠まれていたという推測のもとに施された解釈とみられる。すなわち、同じ時期に源氏が藤壺に贈った歌、

松島のあまの苦屋もいかならむ須磨の浦人しほたるころ

の下の句と同じような内容が、源氏の贈歌に含まれていたという想定である。

この場合、当該歌は、あなたは泣いているとおっしゃいますが私も同じように泣いています、あるいは、私のほうがあなたよりも嘆いています、というように自己と相手とを引き比べた発想の歌ということになる。諸注の比喩の理解ならびに一首の解釈は、贈られた歌に対して切り返す恋歌の常套パターンをモデルとした解釈と思われる。しかしながら、直前に「あはれなることおほくて」と記されている歌に、そのような切り返しの要素を読み取る必要があるだろうか。また、源氏が自分のことを諭えるならともかく、紫上が源氏の境遇について「浦人のしほくむ袖」というわびしい比喩をことさら用いたというのもし自然である。

君を思ふ心ながさは秋の夜にいづれまさとそらにしらなん

(後撰集・恋四・八四二・源是茂・「返し」)

ももはがきはねかくしぎもわがごとく朝わびしきかずはまさらじ
(拾遺集・恋二・七二四・紀貫之・「題しらず」)

わがこひにくらぶの山のさくら花まなくちるともかずはまさ
らじ (古今集・恋二・五九〇・坂上是則・「題しらず」)
わがそでをあきのくさばにくらべばやいづれかつゆのおきは
まさると (後拾遺集・恋四・七九五・相模・「題不知」)

我が袖をたごのもすそにくらべばやいづれかいたくぬれはま
さると (西行法師家集・雑・六五二・「恋歌中に」)

右の歌々のように、和歌においては、極端なもの、あるいは典
型的なものとの比較によって、自らの心境なり境遇なりを強調し
て表現する発想がしばしば用いられる。

当該歌の「くらべみよ」も、諸注がそのように理解しているよ
うな、源氏と紫上の間で閉じた相互比較ではなく、「浦人のしほ
くむ袖」という、濡れた袖の典型を引き合いに出して、それと同
じくらい、あるいはそれにもまさって私の袖は濡れているという
ことを知ってほしい、という形で、紫上が自らの悲しい思いを伝
えたものと解するのが妥当であろう。

五

御返り書きたまふ。言の葉思ひやるべし。「かく世を離るべき身
と思ひたまへましかば、おなじくは慕ひきこえましものをなどな
む。つれづれと心細きままに、

伊勢人の波の上こぐ小舟にもうきめは刈らで乗らましものを
海人がつむ嘆きの中にしほたれていつまで須磨の浦にながめ
む (須磨卷)

この歌の「伊勢人」について、現行諸注の大半は、六条御息所
の比喩と解している。たとえば、新編全集は、「伊勢人は御息所」
と注した上で、一首を、

須磨の浦で浮海布を刈る―憂き目にあうよりも、伊勢人が波
の上を漕ぐ小舟にでも乗ればよかつたものを。

と訳出し、玉上評釈は、

伊勢人のあなたが海上を漕ぐ小舟にも、こんなうきめは刈ら
ないで、ごいっしよするのでしたのに。

というように訳文の中に比喩を反映させる解釈を示している。

●こんな憂き目を見ずに、伊勢にお供しておればよかつたのに
と存じます。(集成)

●伊勢のあなたのもとへ、須磨でつらい目を見るかわりに、いっ
しよに行けばよかつた。(新大系)

集成・新大系は、比喩関係を明示してはいないが、「伊勢人の
波の上こぐ小舟に」乗ること＝伊勢に御息所とともに行くこと、
と大づかみに理解しているものと推察される。

当該歌の上の句「伊勢人の波の上こぐ小舟にも」は、諸注に
よって、

伊勢人は あやしき者をや などいへば 小舟に乗りてや
波の上を漕ぐや 波の上を漕ぐや (風俗歌・伊勢人)

を踏まえていることが指摘されている。この風俗歌で、小舟に乗
る「伊勢人」はわびしく「あやしき」存在として歌われている。

「伊勢人」がそのような負のイメージを伴う以上、六条御息所を
それによそえて詠み贈るとは考えにくい。

諸注の中で、全書・大系が比喩を認めない解釈を行っているの

は、「伊勢人」＝御息所という比喩に必然的に伴う無礼な意味合
いを回避するためであろう。

● かうした憂き目にあふよりは、伊勢人の漕ぐ舟に乗つてあな
たと共に暮すのでした。 (全書)

● 私は、伊勢に行つて、伊勢人が波の上を漕ぐ(危うい事はあつ
ても、憂き目に逢わず) 小舟などにも、乗りたかつたのに
なあ、(須磨では、浮き海布を刈つて居るが) 伊勢では、浮
き海布を刈らずに。 (大系)

けれども、両書の解釈は、「伊勢人の波の上こぐ小舟にももの
ましものを」という歌中に示された思いと、歌の直前に記され、
歌にもそれが反映しているはずの、「慕ひきこえましものを」と
いう源氏の心情とを、うまく統合できているとは言いがたい。

かくばかりこひつつあらずはいはきにもならましものをもの
もはずして (万葉集・巻四・七二五・大伴家持)
なかなかひととあらずはくはこにもならましものをたまの
をばかり (万葉集・巻十二・三一〇〇)

おくれゐてこひばくるしもあさがりのきみがゆみにもならま
しものを (万葉集・巻十四・三五九〇・防人歌)

右の用例からわかるように、「……ましものを」という表現は、
決して望ましいことでもないし、また実現が可能でもない行為を
極端な例としてとりあげ、自分の思いを「……だつてしようもの
を」と強調して表現するものである。特に「おくれゐて……」の歌
は当該歌を理解する上で参考になる。その詠者は、「あなたにつ
いて行きたい」という思いを、「そうするためなら、あなたの弓
にもなろうものを」という形で修辭的に表現している。これと同

様に、源氏は、御息所に向つて、あなたの側にいられるならば、
あの「あやしき」「伊勢人」の漕ぐ小舟にも乗ろうものをと、御
息所への思いを強調して歌つてみせたのである。

六

……雁の連ねて鳴く声楫の音にまがへるを、うちながめたまひて、
涙のこぼるるをかき払ひたまへる御手つき黒き御数珠に映えたま
へるは、古里の女恋しき人々の、心みな慰みにけり。

初雁は恋しき人のつらなれやたびのそらとぶ声のかなしき
とのたまへば、…… (須磨巻)

この歌の「恋しき人」について、多くの現行諸注は、次に例示
するように、「私が恋しく思う人」という解釈を示している。こ
の場合、「恋しき人」は具体的には都に残して来た人を意味する
ことになる。

● 初雁は、私(源氏)の恋しく思つて居る、都の人の仲間(つ
ら)であるからなのであるうか。旅の空を、(鳴きながら)
飛んで行く声の悲しく聞える事よ。(我が思う人も、私の事
を思つて、都に泣いているであろうか。) (大系)

● 初雁は都にいる恋しい人の同じ仲間なのかしら、旅の空を飛
ぶ声が悲しく聞こえてくる。 (新編全集)

これに対し、新大系は、「恋しき人」を「故郷を恋しく思う者」
と訳し、源氏あるいは源氏とその供の者を指す言葉として理解し
ている。

初雁は故郷を恋しく思う者の仲間なのか、異郷の空を飛ぶ鳴き声が悲しく聞こえる。

この新大系の解釈は、時枝誠記氏が次のように論じた所説に従ったものである。

連体形について、主語を想定する必要がある場合と、ない場合とが、同じ形で表現されるために、解釈が動揺する場合がある。「恋しき人」という云い方は、「我が恋しき人」とも、

「恋しく思っている人」とも、両様に受取られるのであるが、ここは、前後の文脈から推して、後の場合で、「都に残して来た女たちを恋しく思っている人即ち我々の仲間であろうか」の意味に解するのがよい。故郷を捨てて旅に出た雁を、源氏自身の心境に比しているのである。この時、歌を詠んだ他の三人も、同様な心境を語っている。

この時枝説に対しては、語法上の観点からの批判が行われている。早く宮田和一郎氏が、「恋しき人」Ⅱ（誰かを）恋しく思っている人」という解を支持するような用例が源氏物語に全く見出せないことを指摘し、根来司氏も、同様の観点から、次のように批判している。

時枝博士はすぐ前に「故郷の女恋しき人々」とあるので、「恋しき人」を都の女たちを恋しく思っている人たちと解したくなるのであるが、私は源氏物語には「恋しき人」を時枝博士が説かれるように用いた例はないと思うので従えない。

その一方で、上野理氏は、時枝説を支持する立場から次のように論じている。

……光源氏の歌は、『拾遺集』（三四五）の能宣歌「草枕我が

みならず雁がねも旅の空にぞ鳴き渡るなる」の影響を考えてもよからう。光源氏は、能宣が、草を枕とする旅にあって古里を恋うているのは自分だけでなく、雁も旅の空にあって古里を恋うて鳴きながら飛んで行く、と旅にある自分と雁を一体視したのを承けて、古里を恋うる従者と雁を一体視し、初雁は古里を恋うる人々の仲間なのか、旅の空を飛ぶ声が悲しく聞こえる、と歌う。

時枝説が語法上の難点を指摘されながらも、このように一部の支持を得ているのは、時枝説に従ったほうが、「たびのそらとぶ声のかなしき」初雁」と「恋しき人」の同質性を見出ししている一首の趣向（「つらなれや」）をより自然に理解できると判断されているためと推察される。その際、「声のかなしき」は、「雁が悲しく思っていてその声が悲しげに聞こえる」ことを示す表現として理解されているのだろう。

そのような「声のかなしき」の理解に関しては、「恋しき人」の理解を異にする多くの注釈書においても同様なのではないだろうか。大系が、「旅の空を、（鳴きながら）飛んで行く声の悲しく聞える事よ。（我が思う人も、私の事を思つて、都に泣いているであろうか。）」と、雁の声から都人の泣く声を連想する心理を補って解釈しているのは、そのことをよく示している。同じように、松尾聡氏の『全釈源氏物語』も、

（都の女は、都にのこされて泣き悲しんでいるであろうが）初雁は、私が恋しく思う（そうした）都の女の仲間であるからか、旅の空を飛ぶ声が（都の女の泣き声のように）悲しい。というぐあいに、雁の声と都人の泣く声を重ね合わせて説明的な

解釈を施している。

しかしながら、「(たびのそらとぶ) 声のかなしき」という構文は、そのように、主語にあたるもの(ここでは「(たびのそらとぶ) 雁」)が悲しく思っていることを示唆する表現ではなく、「(たびの空とぶ) 雁の声が私にとってかなしく感じられる」という意味を表していると解するのが妥当である。

亡き魂ぞいとど悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに

(葵卷)

降りみだれひまなき空に亡きひとの天かけるらむ宿ぞかなしき

(濔標卷)

目の前にこの世をそむく君よりもよそにわかるる魂ぞかなしき

(橋姫)

霜さゆる汀の千鳥うちわびてなく音悲しき朝ほらけかな

(総角卷)

これらの歌の「かなしき」は、すべて「私」ととしての悲しさを表している。「なきたまぞ…」詠の「かなしき」は、亡くなった葵上の魂を思うと悲しいという、源氏の心境を表現し、「降りみだれ…」詠の「宿ぞかなしき」も、六条御息所の死後、残された前斎宮を思うと悲しいという、詠者の心情を伝えている。「目の前に…」の歌は、女三宮の出家も自分にとっては悲しいできごとだったが、それよりも自分の魂がこの世を離れていくことを思うと悲しい、というように、詠者(柏木)にとつて悲しく思われる二つの事柄を比較した歌である。「霜さゆる…」の歌の「なく音悲しき」も、千鳥が悲しいのではなく、千鳥の声が詠者に悲しく聞こえるということを意味している。

右の例と同様に、当該歌の「旅の空とぶ声のかなしき」は、故郷を離れて空を行く雁の心情を付度した表現ではなく、雁の声を聞いてかなしく感じる、詠者源氏の思いを表現している。

「かなし」という形容詞は、「対象への真情が痛切にせまってはげしく心が揺さぶられるさまを広く表現する。悲哀にも愛憐にもいう。」(『日本国語大辞典 第二版』。源氏が当該歌に用いた「かなし」は、「悲しい」に加えて「愛しい」というニュアンスをたぶんに伴っているはずである。「初雁は恋しき人のつらなれや」という上句は、それだけではどうしてそのように言うのか理解しきれない謎を含んでいる。「たびのそらとぶ声のかなしき」は、その謎かけへの解答であり、供の者も読者も「かなしき」に、「恋しき人」への「真情が痛切にせまってはげしく心が揺さぶられるさま」すなわち、「悲しさ」と「愛しさ」のないまぜになつた心情を読み取ることになるのである。

注

(1) 『源氏物語』の引用は、『新編日本古典文学全集』(以下「新編全集」と略称する)により、一部表記を改めた。他の諸注釈書に言及する場合は、以下の略称を用いる。「全書」(『日本古典全書』)、「大系」(『日本古典文学大系』)、「玉上評釈」(『玉上琢彌『源氏物語評釈』)、「集成」(『新潮日本古典集成』)、「新大系」(『新日本古典文学大系』)。

(2) 吉見健夫「夕顔巻の和歌と方法」(『源氏物語の鑑賞と基礎知識 夕顔』、二〇〇〇年一月)

(3) 今井上『源氏物語 表現の理路』(二〇〇八年)。

- (4) 清水婦久子『源氏物語の風景と和歌』（一九九七年）。
- (5) 松下直美「夕顔巻 山の端の贈答歌について」（『国文』九
九号、二〇〇三年七月）。
- (6) 津島知明「歌から読む帚木三帖」（『源氏物語の歌と人物』、
二〇〇九年）。
- (7) 時枝誠記『古典解釈のための日本文法』（一九五〇年）。
- (8) 宮田和一郎「源氏物語須磨の巻「恋しき人」について」
（『平安文学研究』一四輯、一九五四年二月）
- (9) 根来司「物語のことば」（『源氏物語講座1 源氏物語とは
何か』、一九九一年）。
- (10) 上野理「物語の和歌」（『源氏物語講座1 源氏物語とは何
か』、一九九一年）。

（かとうむつみ 本学教授）